

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業

平成29年度 COC+事業報告書

鳥取短期大学 COC+事業推進室

目 次

鳥取県内の COC+事業の取組み	1
I. 平成 29 年度 鳥取短期大学の取組み	2
II. 事業/学科・専攻の取組み表	8
III. 教育の取組み	9
1. 教養科目	9
2. 国際文化交流学科	14
3. 生活学科 情報・経営専攻	16
4. 生活学科 住居・デザイン専攻	21
5. 生活学科 食物栄養専攻	24
6. 幼児教育保育学科	28
7. 特別科目	36
IV. 研究の取組み	40

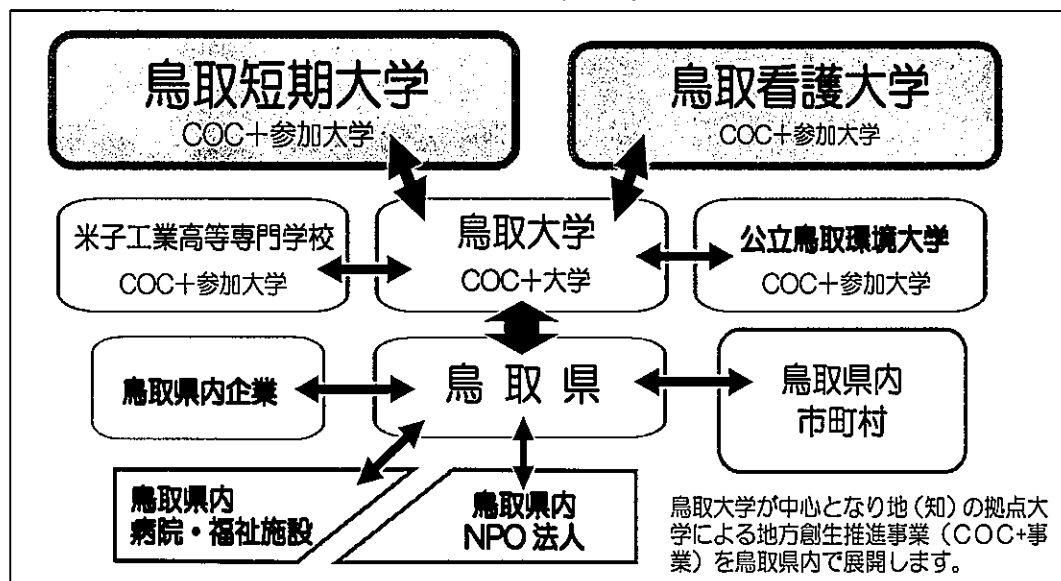
鳥取県内のCOC+事業の取組み

文部科学省では、平成27年度から、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組みを支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」を実施することとなり、鳥取県内の高等教育機関が採択されました。

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業の目的

有能な若者の地元定着と自治体・企業の活性化を実現し、地方創生のモデルとして確立することを目指します。

COC+事業連携図

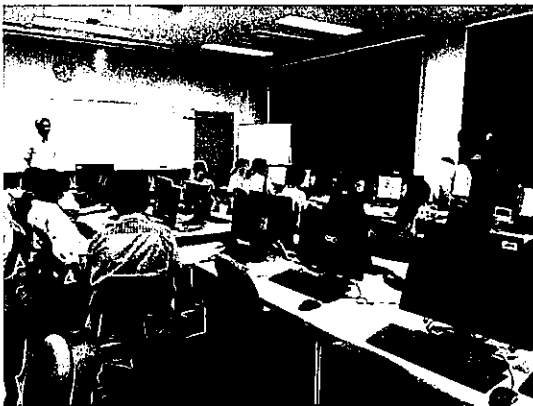


I. 平成 29 年度 鳥取短期大学の取組み

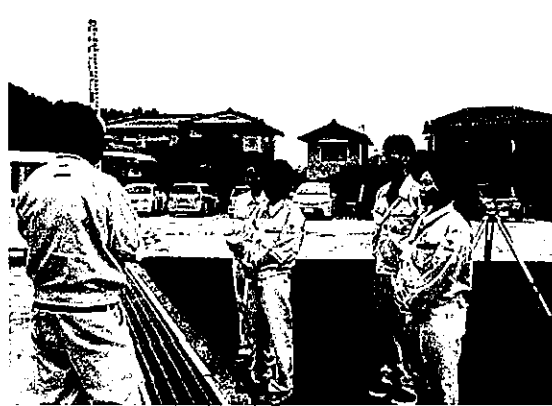
1. 「インターンシップ」の実施

平成 28 年度に引き続き、前期に「インターンシップ A」、後期に「インターンシップ B」を教育課程の特別科目として開講しました。事前学習により、社会人マナーや課題設定、企業研究を行っています。学生たちにとって、実際の職場経験をすることで、職業意識を深め自らの適性を知ることに役立ちます。また鳥取県内の事業所でインターンシップを行うことにより、地元産業等の魅力に改めて気づき、働くことの意義を実感する機会となっています。事後学習では、実習の振り返りと成果発表を行い、学習成果の確認も行っています。そしてインターンシップフェスティバル等の、大学と事業所の意見交換の機会を通して「企業の PR 効果を期待」「学生実態の理解に役立つ」「学生の就業意欲の向上」「職場の活性化」「県内の高等教育機関との連携強化」「優秀な人材の発掘」などの成果が示されており、県内の多くの事業所がインターンシップの受け入れ先となっています。

【事前学習】



【インターンシップの様子】



2. COC+セミナーの開催

「フィールドは鳥取県中部！—魅力ある企業人・地域人として—」

平成 29 年 12 月 12 日（火）、A309 講義室にて、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）のセミナーを実施しました。当日は、「現代鳥取研究」の受講学生に加え、大学教職員、一般来場者を含め約 60 名の参加がありました。生活学科情報・経営専攻の野津伸治教授の進行により、パネリストに、牧野健治氏（株式会社エナテクス経営戦略室室長）、仲村美枝氏（株式会社ヴィスコポーレーション/株式会社ネクストアイ代表取締役）、加藤一巳氏（有限会社辰巳園代表取締役）の 3 名をお迎えしシンポジウム形式で開催しました。鳥取県中部を拠点に活躍するパネリストの方々には、企業人として、また地域住民として、この地でがんばる想いや、日々の仕事を通して感じている地域の魅力、若い人たちに伝えたいことなどを語っていただきました。参加者からは、「第一線で活躍される方の貴重なお話は、学生たちにとって、今後の進路にも良いアドバイスになった」などの感想がありました。

【日本海新聞 2017. 12. 13 掲載】

【シンポジウムの様子】

3. 「社会人マインド醸成 実践的ビジネスマナー」講座開催

2年生・専攻科生を対象に、卒業前となった2月にビジネスマナー講座を行い、“社会人としてのマナー”の強化に取り組みました。講師に田栗万悠氏（MIPI 心の印象プロデュース研究所 所長）をお招きし、企業の求めている人材像を理解し、そのために必要な知識や技能の習得に向けた取り組みについて事例を交えながら講演していただきました。また、「敬語」や「来客対応」など演習を通じてトレーニングし、社会人としての基礎力向上に向けた取り組みともなりました。今後それぞれの勤務先でどのように働くのか、どのように生きていくのかを考える機会になりました。

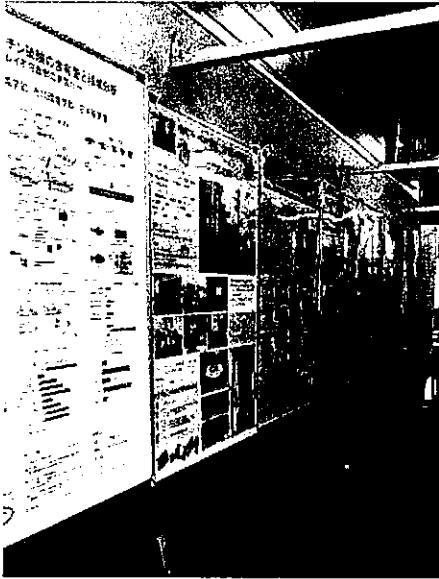
【「ビジネスマナー講座」の様子 平成30年2月19日（月）】



4. 研究パネル展開催

平成29年度より、高校生の県内大学への進学意欲の醸成を目的として、鳥取大学のCOC+推進事業の一環として、研究パネル展を実施しました。倉吉西高校を皮切りに県内の4校で開催し、鳥取大学、鳥取看護大学、本学の研究パネルの展示を行いました。高校生だけでなく、保護者の方々や高校の先生方にも、身近な県内の大学が行っている研究の一端を知ること、県内大学への理解を深めていただくことも目的としています。本学は、八頭高校（9月27日～10月13日）、鳥取東高校（10月16日～11月2日）、倉吉総合産業高校（1月9日～23日）での展示を行い、それぞれ5枚のパネルを提供しました。見学した生徒さんからは、「難しい内容だったけど、興味が湧いた」「大学についてよく分かった。行きたくなった」などの感想が聞かれました。今後もこのような県内高校での研究パネル展を通して、県内高校生の地元高等教育機関への理解と進学意欲が高まればと願っています。

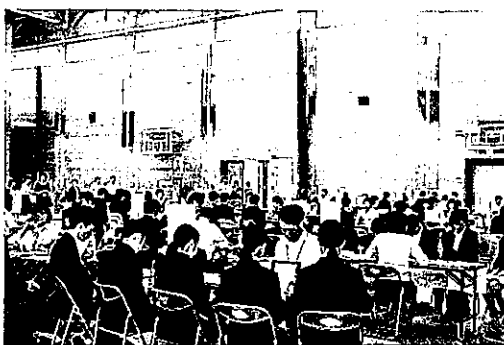
【鳥取県立倉吉総合産業高校でのパネル展の様子】



5. 「鳥取短期大学 就職面接会」開催

鳥取短期大学と鳥取労働局の共同開催で「鳥取短期大学 就職面接会」を実施しました。今年は規模を拡大し体育館で実施しましたが、年々企業の採用スケジュールが早期化することに合わせ例年より早い6月に開催しました。鳥取県内の企業・施設を中心に人事担当者の方々に本学にお集まりいただき、学生と直接面談をすることで就職内定に結び付けるマッチングの機会となりました。今後も地元企業や関係機関のご協力をいただきながら、学生個々にあった進路支援に結び付ける取組みとして継続していきます。

【「鳥取短期大学就職面接会」の様子 平成 29 年 6 月 28 日（水）】

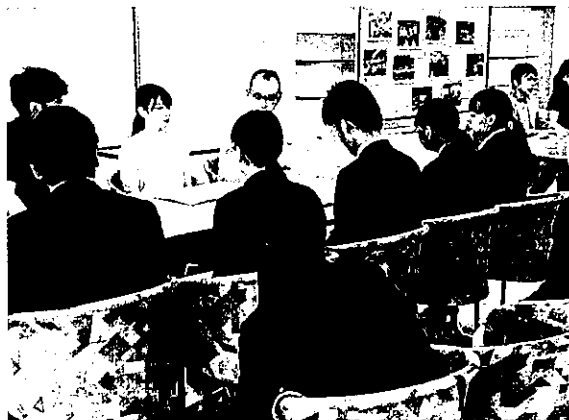


6.「保育学生のための職場説明会」の実施

鳥取県内の保育者確保に向けて、鳥取県福祉保健部子育て王国推進局をはじめ鳥取県社会福祉協議会・鳥取県福祉人材センター、鳥取県私立幼稚園・認定こども園協会の協賛を基に、平成28年度に引き続き2回目となる「保育学生のための職場説明会」を開催しました。

この説明会は、保育士・幼稚園教諭の仕事について更なる理解を深めることを目的とし、保育の仕事の魅力や求められる人物像などについて、現場の職員から直接説明を受けました。当日は、鳥取短期大学を会場として33施設、参加学生は本学の幼児教育保育学科1、2年生に加えて、今年度は鳥取大学地域学部の学生3名を含む計139名が参加をしました。参加した学生のアンケート結果では、8割の学生が「参加してよかった」と回答しており、「働くイメージが湧き、保育の仕事への関心が高まった」「保育士として働くことへの不安が解消した」などの感想がありました。また、6割の学生が「働きたいと思える施設が見つかった」としていることから、今後も継続して実施し、鳥取県内の保育者確保に努めていきたいと考えています。

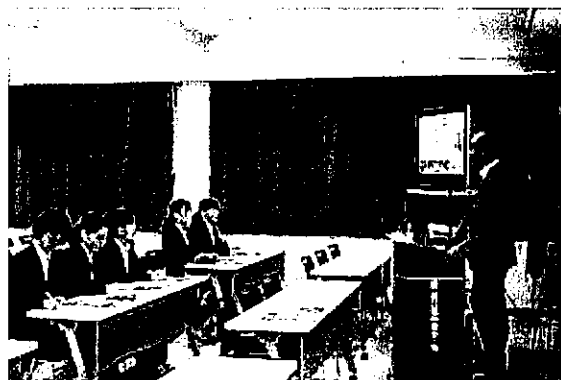
【「保育学生のための職場説明会」の様子 平成29年7月5日(水)】



7.「栄養士のための企業説明会」の実施

鳥取短期大学の栄養士養成課程である生活学科食物栄養専攻の2年生を対象に「栄養士のための企業説明会」を実施しました。この説明会は、県内を中心に栄養士職定期採用を行っている受託給食会社5社を迎え、担当者から直接説明を受けることにより、学生たちの栄養士として従事する意識を高めることを目的に実施しました。参加した企業は、勤務地が鳥取県内に存在する企業が多く、結果として県内就職者数の向上につながる取組みになりました。

【「栄養士のための企業説明会」の様子 平成 29 年 6 月 7 日（水）】



8. 鳥取県内の全ての高等学校に訪問し、「COC+事業」を紹介しました。

鳥取短期大学の教職員とCOC+事業中部コーディネーターが6月から9月の期間、鳥取県内の全ての高等学校を訪問し、進路指導部の先生方に対して「COC+事業」についての詳細な説明を行いました。具体的には、本事業の目的である鳥取県内への地元就職率向上に向けた本学独自の様々な取組みや、鳥取県内におけるインターンシップの推進状況などを紹介しました。また、各高等学校出身者の卒業生の進路状況、在学生の進路希望状況の報告も同時に行い、鳥取県内への若者の定着に向けた本事業の趣旨を説明する有意義な機会となりました。

9. 「保育学生のための職場見学会」の実施

今年度新たな取組みとして、平成 30 年 3 月 8 日（木）に「保育学生のための職場見学会」を実施します。この見学会は、保育現場を視察することにより保育業務への理解を深め、就業意欲を高めるとともに、県内就職率アップに繋げることを目的としています。本学の幼児教育保育学科 37 名と鳥取大学地域学部人間形成コース 16 名の学生が、鳥取県内全域 20 の保育園・幼稚園・施設等を、5 つのコースに分かれ見学をします。今後も県内の保育所・幼稚園・施設等と連携を図りながら保育者確保に向けた取組みを行っていきます。

Ⅱ. 事業/学科・専攻の取組み表

		教育の取組み			研究の取り組み
		地域志向教育 (受講者数)	キャリア教育 (受講者数)	インターンシップ (受講者数)	
全学共通	教養科目	・現代鳥取学(84名) ・現代鳥取研究 (34名)	・キャリアデザイン 入門 (264名)		
	特別科目			・インターンシップA (26名) ・インターンシップB (23名)	
国際文化交流学科	専門教育 科目		・キャリアデザイン (45名)		
情報・経営専攻	専門教育 科目	・プロジェクト演習 (ビジネス) (14名)	・キャリアデザイン (41名)	・ビジネス実務実習 (27名)	
住居・デザイン専攻	専門教育 科目	・特別研究 (19名)		・学外実務実習(12名)	
食物栄養専攻	専門教育 科目	・教職実践演習(栄養 教論) (10名)		・栄養教育実習(10名)	・食育に関する 研究
幼児教育保育学科	専門教育 科目	・特別研究Ⅰ(108名) ・特別研究Ⅱ(81名)		・教育実習Ⅱ(119名) ・保育実習Ⅰ-1 (120名) ・保育実習Ⅰ-2 (114名) ・保育実習Ⅱ(53名) ・保育実習Ⅲ(61名)	

Ⅲ.教育の取組み

1.教養科目(1)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 前期
学年・学科・専攻名	1年生 国際文化交流学科、生活学科(情報・経営専攻、住居・デザイン専攻、食物栄養専攻)
区分 科目名	教養科目 現代鳥取学
選択種別・授業形態・単位数	選択 講義 2単位
授業担当者・所属	野津伸治、三沢英貴 他 生活学科情報・経営専攻 他
受講率(%) 受講者/対象者	(57.5)% 84 / 146
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	私たちの学んでいる鳥取県の現状や課題を理解する。鳥取県内で活動している様々な組織の方から取組みを紹介してもらい、いくつかの分析手法の視点で見直す。また自分の出身地との比較も行い、これらの成果をグループで議論し発表する。
到達目標	・地域の現状を分析する。 ・課題の解決策を提案する。
評価方法	レポート60%、発表40%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	インターンシップ先や学外実習先の対象となる企業等の置かれている社会的・歴史的な背景を理解し、ステークホルダーが課題解決に活動している実態を理解でき、学生としての関心と課題解決策の提言を通して学びの目標設定が明確になった。
鳥取県内での就職との関連性	就職先の対象となる企業等の置かれている社会的・歴史的な背景を理解し、企業等が課題解決に活動している実態を理解でき、学生としての地元企業等の関心と具体的に一員として寄与したいという思いを醸成することにつながった。

学 習 成 果

行政やNPO等の様々な活動をSWOT分析とTOWS分析を通して受け止めることができるようになった。具体的には、3つのNPOの取組みをTOWS分析の結果としてとらえ、その前提のTOWS分析を学科横断のグループワークで探り、自分たちもNPOの一員と見立てて、5W1Hを踏まえた新たなTOWS分析に基づく提案を行った。前年度より、より具体性が増す提案が多く見られた。



1.教養科目(2)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	1年生 国際文化交流学科、生活学科情報・経営専攻、幼児教育保育学科
区分 科目名	教養科目 現代鳥取研究
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 2単位
授業担当者・所属	野津伸治、三沢英貴 生活学科 情報・経営専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(15.9) % 34 / 214
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	鳥取県が抱える課題を主な素材として、グループによる課題解決型学習(PBL:Project Based Learning)を行う。研究の流れや手法を学んで、グループごとに題材を設定し、フィールド調査を踏まえて研究する。
到達目標	・鳥取県の現状を理解し、そこでの仕事や市民生活に対する問題意識を高める。 ・課題解決型学習を通して、コミュニケーション能力を高める。 ・社会的・職業的に自律するための能力開発に取り組む学習態度を身につける
評価方法	レポート60%、発表40%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	本科目の開講学期と前学期に県内インターンシップに参加している者が一定数いる。インターンシップでのフィールドの経験が地域課題の理解にも大きく貢献している。
鳥取県内での就職との関連性	本科目を履修して地元就職を目指して活動する場合、就職先の取り巻く環境の理解と合わせて地域社会の一員として課題解決に積極的に取り組む姿勢と知識を得られた。

学 習 成 果

鳥取県中部で地域の活性化に取り組んでいるNPOのフィールドワークを通して経験し、また町全体の状況も講義を通して理解できた。この知識と経験を踏まえてSWOT分析で背景と彼らの活動を分析した。さらにTOWS分析に繋げることで課題解決の提言をグループ活動で行えた。後半は鳥取県内の産業界の現状を、講義とセミナーを通して直接地元の第一線で活躍している方々から聞き、SWOT分析で客観的にとらえ、自分たちが卒業後に就職や起業等を通して自分の課題として地域課題を仕事や地域活動で克服していくことをグループワークで議論し宣言できた。



1.教養科目(3)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 前期(幼児教育保育学科以外)・後期(幼児教育保育学科)
学年・学科・専攻名	1年生 全学科
区分 科目名	教養科目 キャリアデザイン入門
選択種別・授業形態・単位数	選択 講義 2単位
授業担当者・所属	河村 壮一郎、植木 洋 住居・デザイン専攻、情報・経営専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(93.0)% 264/283
分野	キャリア教育
授業概要	キャリアデザインとは、自分の職業人生のプランを自身で主体的に構想し設計することである。授業では将来の自己像を明確にし、現代社会の理解に基づいて進路選択に向けて実践的に取り組む態度を形成する。
到達目標	・自己の行動や性格の特徴を深く理解し、他者に説明することができる。 ・現代社会の状況に基づいて、卒業後の進路を選択することができる。 ・社会で働く意義を理解し、キャリアライフに積極的な態度をもっている。
評価方法	レポート80%、発表20%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	学外実習やインターンシップの基礎となる就職に関わる多様な知識を学び、積極的に取り組む態度を形成する。
鳥取県内での就職との関連性	鳥取県内で就職活動をすすめるための基礎を学び、鳥取県で就職する意欲を高める。
学習成果	キャリアデザインを考えるためには人間の発達プロセスとライフサイクル、家族形成とその発達を理解することが重要であることを理解した。また、自己の性格理解とキャリアデザインとの関連、クリティカルシンキングによるプランニング、ジェンダーとワークライフバランス キャリア形成で必要なコミュニケーションスキルについても知識を得た。現代社会について、日本の経済状況と生活との関わり、日本型雇用システムとキャリア形成、雇用と法との関係等について理解を深めた。

2. 国際文化交流学科

COG+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 通年
学年・学科・専攻名	1年生 国際文化交流学科
区分 科目名	専門教育科目 キャリアデザイン
選択種別・授業形態・単位数	必修 講義 2単位
授業担当者・所属	板倉一枝 国際文化交流学科
受講率(%) 受講者/対象者	(118.4)% 45/38 ※再履修の学生7名を含む
分野	キャリア教育
授業概要	まずは大学生活の目標を立て、大学でのスタディスキルについて学ぶ。 さらにキャリアとは何かを学び、職業理解や自己理解などのワークを通して自分のキャリアについて考え、キャリア形成の実践につなげる。
到達目標	・大学で何をどう学ぶかをプランニングし、学び方の技法を身につける。 ・将来的な見通しを持った上で自分のキャリアについて主体的に考える態度を有する。 ・キャリアの基礎知識を理解し、どう実践していけばよいか考えることができる。
評価方法	定期試験(筆記)30%、授業態度30%、提出物40%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	授業の中で自己分析に取り組むと、自分の目標を持っておらずまた適性が不明であることを自覚する学生が多い。学科の専門教育科目「地域社会体験」(1年次・必修)で2日間の就業体験を行うが、その中で職業理解、地域理解、実習先で働く方から仕事への思いなどを学び、さらなる自己理解へとつなげていっている。
鳥取県内での就職との関連性	学生の身近な人にインタビューを行っている。その方のワークライフバランス、仕事に対する思い、職業以外の役割(仕事)などを調査することにより、県内で働く方の仕事や生活に触れ、自分自身の就業意識を高めている。

学 習 成 果

- 1) 普段の生活において異年齢の方に仕事の話聞く機会が少ないため、ワーク(身近な人へ仕事に対する思いなどをインタビューする)や「地域社会体験」の学びなどから、授業を通して実際に働く方から話を聞く機会を持てたことは有用であったとの声が多く聞かれた。
- 2) 昨年に引き続き、自分がどのような人生を送りたいのかということについて、画用紙を使ってビジュアル的に表現する手法を取り入れた。学生たちは自分の人生について楽しみながら考えることができていた。振り返りを行うと、自分が具体的な将来を描けていないこと、また目標をもって日々を過ごしていないことへの気づきが得られていた。また、学生の多くは自分の思い描く人生の中に職業を意識できておらず、自身の人生の中にどう職業を位置づけ社会とのかかわりを持っていくのか、振り返りをもとに、再度人生について考えることができた。
- 3) 「大学生に求められる力とはなにか？」ということについてグループワークで意見を出し合うと同時に、「基礎的・汎用的能力」「社会人基礎力」などについて調べてレポートにまとめた。社会人となった際にどのようなことが求められ、そして残りの大学生活で何をすべきかの確認を行った。自分たちの考えたことと社会から求められていることの差を認識し、そこをどう埋めていくのか、具体的な目標を立てることに繋げることができた。
- 4) 特別講師からワークルール、求人票の見方や会社の選び方などについての講義を受け、就職活動への意識を高めることができた。

3. 生活学科 情報・経営専攻(1)

COC+関連授業評価シート

年度・前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	1年生 生活学科 情報・経営専攻
区分 科目名	専門教育科目 プロジェクト演習(ビジネス)
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 1単位
授業担当者・所属	植木洋、橋本和久 生活学科 情報・経営専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(34.1)% 14/41
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	地域が抱える課題を主な素材として、本専攻で学んだ知識・スキルを活用しながら、チームによる課題解決型学習(PBL:Problem Based Learning)を行う。
到達目標	・課題解決学習を通して、職業生活、市民生活に対する問題意識を高めることができる。 ・自己理解を深めることができる。 ・社会的・職業的に自立するための能力開発に取り組む学習態度を身につけることができる。
評価方法	レポート35%、発表35%、授業態度30%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	昨年度協力を得た行政機関や民間団体に加え、今年度は新たに商店街振興組合からの協力も得てより充実した調査活動が行えた。これによって、次年度以降さらに学びを深めることも可能な基盤を確立することができた。
鳥取県内での就職との関連性	受講学生が地元の課題を知るとともに良さも発見するきっかけとなった。今後、県内就職を希望する学生が増えることが期待される。

学 習 成 果

本授業では「倉吉市の商店街をいかに活性化させるか」をテーマに課題解決型の学習をおこなった。

前半は倉吉市が作成した『中心市街地活性化基本計画(以下、基本計画)』を素材に市の沿革や概要、抱える課題を含め全体像の共有化を図った。

中盤はフィールドワークとそのまとめの期間に位置付けられている。フィールドワークにおいては『基本計画』作成に携わっておられる市職員の方に計画の進捗状況とその評価をテーマに講演していただくとともに、文献調査で出されていた疑問点を質問した。さらに、重点施策の一つである空き店舗対策事業を担当されている市職員の方とともに、今年度は新たに地元の商店街振興組合の方々にお話を伺うことができた。また、街中を歩き商店主の方々にインタビューを行うなど多角的に問題を捉える視点を形成していった。

その後、KJ法やSWOT分析を活用し、フィールドワークにおいて学んだことを整理したうえで、自分たちで商店街の課題を発見するとともに課題解決の案を考える段階に進む。最終的に、昨年度と同じく並行開講されている「プロジェクト演習(情報)」との合同発表会に向けスライド作成を行い、発見した課題とその解決策を報告した。

こうした学習を通じて、リーダーを務めた学生は、『私はグループのリーダーを半ば強制的に押しつけられる形ではじめました。最初はグループでやる作業を一人でやるが多かったです。メンバーに仕事を割り振るべきだったと反省しています。終盤のスライド作成はグループで上手く協力できたと思います。信頼しあうにはお互いにコミュニケーションをとることや自分の仕事をきちんとこなすことが必要だと思いました。』とコメントを残すなど、チームとして機能するにはコミュニケーションに基づく相互の信頼関係が大切であることを学ぶなど大きな気づきを得ることができた。

また、他の学生は『今回のプロジェクト演習を通して、自分は物事をいろいろな角度から見る力がついたと思います。最初に学習を始めたときは「〇〇がない」「〇〇が足りていない」などのマイナス面だけ見て考えていました。しかし、フィールドワークなどでいろいろな方たちのお話を聞いて、「倉吉には都会にないものがある。」と言われていたことで、そのないものをどう活かすかを考えられるようになりました。地域間でのつながりだったり、自然だったりと考え方の幅が広がったことで新しい対策を考え付くことができました。』という感想を述べていた。以上のような声に代表されるように、多くの受講生が自己理解・他者理解を深めるとともに、社会問題への関心を深めるなど本授業の到達目標を十分に達成することができた。

3. 生活学科 情報・経営専攻(2)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	1年生 生活学科 情報・経営専攻
区分 科目名	専門教育科目 キャリアデザイン
選択種別・授業形態・単位数	必修 演習 2単位
授業担当者・所属	植木洋、橋本和久、三戸鉄也 生活学科 情報・経営専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(100)% 41/41
分野	キャリア教育
授業概要	本専攻のキャリア形成に必要な考え方や態度を学ぶとともに、キャリアデザインに関わる実践的な内容と方法について学習する。また、就職試験など実際の場面を想定した模擬演習を通して必要なスキルを習得する。本学キャリア支援部が実施するガイダンス等の各種のプログラムも授業の一環として扱う。
到達目標	・キャリア形成に必要な考え方と自己理解の方法を知っている。 ・卒業後の進路に備えたスキル(チームワークや対人コミュニケーション力)を身につける。 ・受講生一人ひとりがそれぞれの進路に備えた活動ができるようになる。
評価方法	最終課題レポート50%、授業態度30%、提出物20%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	この授業での学び(自己理解・職業観・対人コミュニケーションなど)があることでインターンシップ先での就業体験がより有意義なものになる。
鳥取県内での就職との関連性	・授業の初期の段階で、ハローワーク倉吉から特別講師を迎え、鳥取県内の雇用情勢について学び、鳥取県内での効果的な就職活動について考える機会を設けている。 ・鳥取県内のファイナンシャルプランナーを特別講師に迎え、鳥取県と他地方(首都圏が中心)との賃金や暮らし方の違いについて講演をいただくことにより、これまで他の都道府県に目を向けていた学生が鳥取県内での就職を考えるようになってきた。 ・学生が企業研究を行う際に、鳥取県内の企業の求人票やホームページを参照するように指導している。

学 習 成 果

- ・キャリア形成と自己分析に関するグループワークなどを通して、自己分析を具体的に進める手法を学び、自己理解ができるようになった。また、これらの学びを通して、自分自身のキャリアパスを考えることができるようになった。
- ・情報分野およびビジネス分野で活躍する企業の代表者を講師に迎え、短大での学びとそれぞれの仕事との関連性を知る機会を設けることにより、これまで漠然と受講してきた個々の授業を具体的な仕事と結び付けて考えるようになった。
- ・本専攻の卒業生や就職活動の終了した在学生の話を聞くことにより、どの時期にどのような就職活動を進める必要があるかなど具体的な行動について理解し、就職活動に向けての意識も高まった。
- ・職業研究や企業研究の方法を学び、求人票の見方についても理解が進んだ。
- ・履歴書やエントリーシートを何度も書くことにより、作成の方法や要領を具体的に身につけ、効果的な自己表現ができるようになった。
- ・成績評価が示すように、これまで漠然としか職業や就職を理解していなかった学生が、授業が進むにつれて自分自身の将来設計や職業適性を具体的に考えるようになってきており、職業観の育成に寄与している。
- ・今後は、これまで学んだ成果を具体的な就職活動にどのように活かすことができるのか、また就職後に社会人としてどのように自己実現に向け行動することができるのか、といった点が課題である。

3. 生活学科 情報・経営専攻(3)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 2年生 前期 / 1年生 後期
学年・学科・専攻名	生活学科 情報・経営専攻
区分 科目名	専門教育科目 ビジネス実務実習
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 1単位
授業担当者・所属	岩井和由 生活学科 情報・経営専攻
受講率(%) 受講者/対象者	2年生 (4.3) % 1/23 ・ 1年生(65.0) % 26/40
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	ビジネス実務に関する既得の知識、技能について実際のビジネスの現場にふれてみて、その体験により、より深い理解を取得する。各自が受け入れ企業を開拓する活動は就職活動にもふれる。
到達目標	・自分が得た知識をビジネスの現場で生かすことができる。 ・自分に不足する事項を確認し、補うことができる。
評価方法	実技50%、提出物50%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	情報・経営専攻の専門科目(「ビジネス実務概論」と「ビジネス実務演習A・B」)の先行科目で深めた知識・技能をこの「ビジネス実務実習」というインターンシップを通じて実践できた。
鳥取県内での就職との関連性	県内企業等の魅力や働くことの意義を確認でき、就職先の選択肢として後方になりうる
学習成果	先行科目「ビジネス実務概論」での学んだ現代社会におけるビジネスの基本の理解と実践的な実務能力の基礎を、同じく先行科目「ビジネス実務演習A」ではビジネス実務の基本スキルと心構え、行動について学習し、「ビジネス実務演習B」ではビジネスの現場において必要とされる実務の様々な事項を演習という形で確認し身につけた。これらの学習を県内企業ビジネスの実践の場で体験し、定着を図れた。

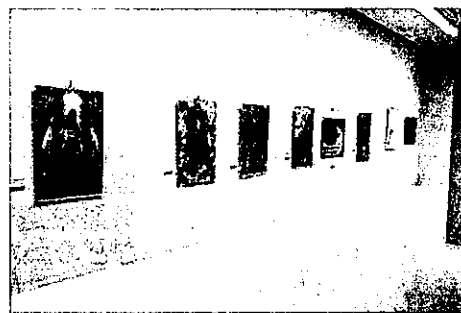
4.生活学科 住居・デザイン専攻(1)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 通年
学年・学科・専攻名	2年生 生活学科 住居・デザイン専攻
区分 科目名	専門教育科目 特別研究
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 2単位
授業担当者・所属	生活学科 住居・デザイン専攻専任教員
受講率(%) 受講者/対象者	(86.4) % 19 / 22
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	住居・デザイン専攻の専門教育科目の中で、より専門的に学びたい分野を選び、テーマを決めて取り組む。成果は論文、作品、資格取得などのかたちとする。担当教員の、各人の必要に応じた指導や助言で、効果的に一定の成果を示すことができる。
到達目標	これまで学習してきた内容を基に、自ら考えたテーマに主体的に取り組む、研究の順序立て、考察ができ、一定の成果を示すことができる。
評価方法	提出物70%、発表30%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	鳥取県での学外実習での学びを深め、特定のテーマで研究をすすめる。
鳥取県内での就職との関連性	鳥取県内での学習成果を発表する場を設けることで、地域と学習活動との関連性を理解し、鳥取県で就職する意義を学ぶことができる。

学 習 成 果

学生は地域で必要とされる地域活性化、住環境プランや生活に係わりのあるグラフィック作品を作製した。特別研究で作成したこれらの作品は県内外(松江市、鳥取市、倉吉市、米子市)で展示した。これらの展示を通して学習成果を地域に向けて発信できた。



4.生活学科 住居・デザイン専攻(2)

COC+関連授業評価シート

年度・前・後期別	平成29年度 前期
学年・学科・専攻名	2年生 生活学科 住居・デザイン専攻
区分 科目名	専門教育科目 学外実務実習
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 1単位
授業担当者・所属	生活学科 住居・デザイン専攻専任教員
受講率(%) 受講者/対象者	(54.5) % 12 / 22
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	建築・デザイン系の地元、あるいは近県企業(建設会社、設計事務所、デザイン会社、印刷会社等)にて実務体験を5日間行う。そこで、実務の仕組などを知り、将来の専門職を志している学生にとっては貴重な体験となる。
到達目標	実務体験を通して、座学の知識と実務の難易度を理解するとともに、コミュニケーション力を身につける。
評価方法	授業態度20%、提出物80%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	建築・デザイン系に限定した企業を、教員あるいは学生の希望で選定している。企業は原則県内である。
鳥取県内での就職との関連性	県外の学生は出身地の企業、県内出身学生は概ね県内に就職をしている。
学習成果	受講した学生と未受講の学生を比較すると、受講した学生は卒業後の生活設計を考えている。建築系は多種の資格取得が卒業後に控えているため、そちらの意識も高くなっている。現実を確認できている。

5.生活学科 食物栄養専攻(1)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	2年生 生活学科 食物栄養専攻
区分 科目名	専門科目 教職実践演習(栄養教諭)
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 2単位
授業担当者・所属	野津あきこ 生活学科食物栄養専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(21.7)% 10 / 46
分野	・地域志向教育(PBL含む) ・キャリア教育
授業概要	栄養士の専門性や教育実習等、実践現場の経験を踏まえた内容とする。栄養教諭として、「食に関する指導」に必要な“授業”と“個別指導”に焦点を当て、確かな実践的指導力を養う。また講義や演習、発表、ロールプレイング等を組み合わせ、実際の教育現場を想定した教育課題を取り扱う。
到達目標	・教員に求められる使命感や責任感等及び学級経営に関する事項を理解する。 ・幼児、児童及び生徒の栄養に関わる課題を理解する。 ・食育等に関する指導力や対人関係能力を身に付け、実践できる。
評価方法	レポート60%、授業態度20%、発表20%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	幼稚園や船上山少年自然の家など地元の教育関連施設と連携した授業を展開することができた。県内で働く栄養士との意見交換や地域での「食育」を実践したことで、栄養士の仕事や職場を身近に感じることができた。
鳥取県内での就職との関連性	県内の栄養士との交流の機会を増やすことで、仕事や職場に対しての理解が深まる。その成果として栄養士資格を活かした地元就職が多い。
学習成果	1. 園児との交流 ・こども園年長さんとの芋ほり(10月18日)、さつま芋クッキング(1月10日) 6月のサツマイモの苗植えから草取り、収穫、クッキングと約半年にわたって園児との交流を行った。当初は、子どもたちとの関わり方がわからないといっていた学生たちだが、後期になると積極的な声掛けや子どもたちへの配慮ができるようになる。学生は園児への食育指導、クッキングなど企画から行った。

学 習 成 果

・こども園教諭、栄養士さんとの意見交換会(2月10日)

さつま芋クッキングでは、「ミニクロワッサン」「さつまいもマフィン」の2種類を作った。マフィンに時間がかかってしまい、園スケジュールに支障が出たことが反省点である。栄養士として働くうえで食事の提供時刻を守ることは必須であると栄養士さんからアドバイスがあった。



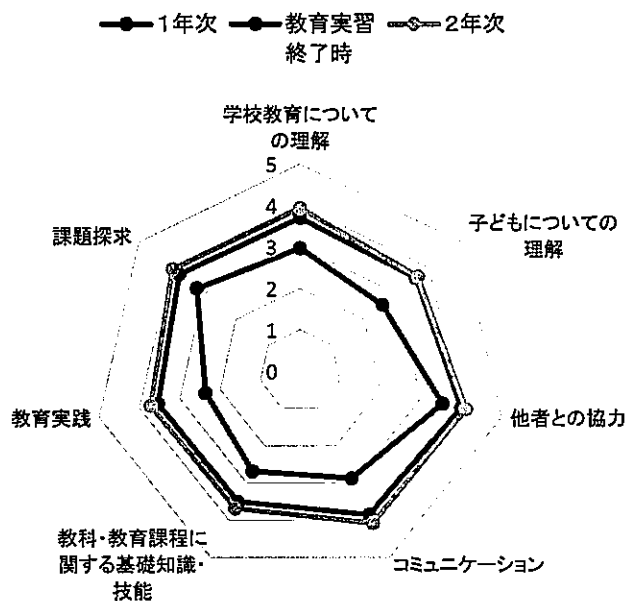
2. 船上山少年自然の家(教育関連施設)での研修(1月24日)

施設指導員から本施設の役割や活動内容、栄養士からは栄養士業務についての説明を聞いた。学生たちは食育活動を含む栄養士業務等についての意見交換をおこなった。就職内定後に栄養士との交流の場が持てたことで、4月からの仕事までに準備しておくことなどの確認ができた。

3. 教職履修カルテの自己評価の分析結果(教育実習後と2年次の比較)

1年次終了後、教育実習後と2年次(卒業前)についての差を比較した。1年次終了後と2年次を比較すると、教育実践(授業展開力、教材開発力)1.4、子どもについての理解(心理・発達論的な子ども理解、学習集団の形成、子どもの状況に応じた対応)1.2、コミュニケーション(発達段階に対応したコミュニケーション)1.1の伸びが他の項目より高い傾向がみられた。

平成29年度 必要な資質能力についての自己評価(n=10)

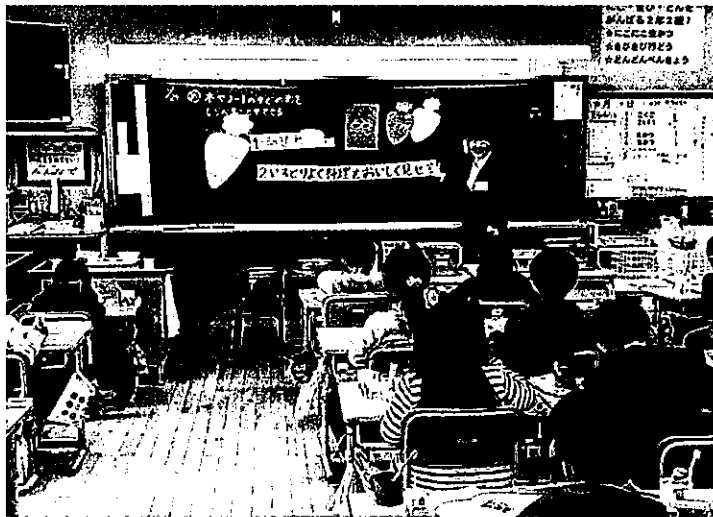


5.生活学科 食物栄養専攻(2)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	2年生 生活学科 食物栄養専攻
区分 科目名	専門科目 栄養教育実習
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 1単位
授業担当者・所属	野津あきこ 生活学科 食物栄養専攻
受講率(%) 受講者/対象者	(21.7)% 10 / 46
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	小・中学校で学校給食の役割や意義を理解しつつ、「食に関する指導」を中心に学び、実践する場である。栄養教諭、養護教諭、家庭科、保健体育科等の教諭から指導を受けることが多いが、その他学校全般や児童・生徒との接し方、道徳授業での食事マナーなど幅広く学ぶ機会となる。
到達目標	・栄養教諭の役割や他の教諭とのかかわり方、児童・生徒への支援ができる。 ・学校給食の役割や意義が説明できる。 ・給食をどのように生きた教材として活用するなどの「食に関する指導」が実践できる。
評価方法	実習先の評価70%、レポート30%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	栄養教育実習の実習先は、鳥取県内であり、鳥取県内の教育委員会や学校と連携して実施している。
鳥取県内での就職との関連性	栄養士資格を活かした県内での就職が多い。
学習成果	1. 教育実習の様子(写真)及び報告会(12月6日) 後期1単位(5日間)という短い期間ではあったが、事前事後学習も含めて下記について確認を行った。 (1)指導案や教材作成について事前にきちんと学んでおくこと。 (2)児童・生徒と積極的にかかわること。

- (3) 時間を守る。
- (4) 挨拶をきちんとする。笑顔も大切。
- (5) 敬語の使い方に気をつける。
- (6) お礼の言葉、感謝の気持ちをわすれない。
- (7) わからないことは、自分で判断せず質問をする。

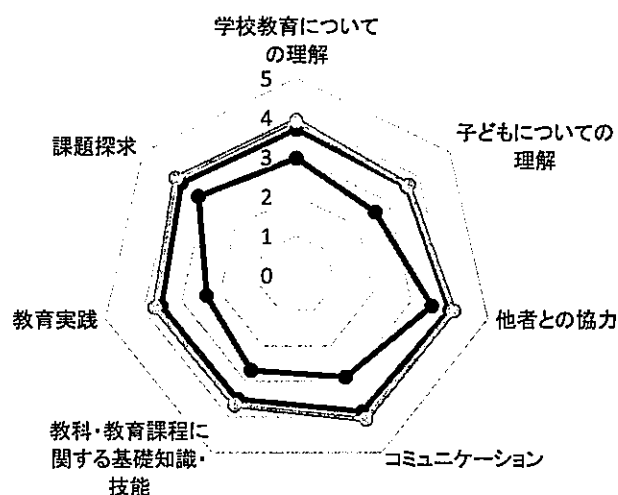


2. 履修カルテからの学習成果

1年次終了後、教育実習後と2年次(卒業前)についての差を比較した。1年次終了後と2年次を比較すると、教育実践(授業展開力、教材開発力)1.4、子どもについての理解(心理・発達論的な子ども理解、学習集団の形成、子どもの状況に応じた対応)1.2、コミュニケーション(発達段階に対応したコミュニケーション)1.1の伸びが他の項目より高い傾向がみられた。

平成29年度 必要な資質能力についての自己評価(n=10)

● 1年次 ● 教育実習 ● 2年次
終了時



学 習 成 果

6.幼児教育保育学科(1)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 前期
学年・学科・専攻名	2年生 幼児教育保育学科
区分 科目名	専門教育科目 特別研究Ⅰ
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 1単位
授業担当者・所属	幼児教育保育学科専任教員
受講率(%) 受講者/対象者	(85.7)% 108/126
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	この科目は、保育者または社会人として自己の研究意識を持つため、設定される分野単位(研究室単位での開講)で研究テーマを設定し、様々な研究手法を通じて研究課題を探るものである。
到達目標	・専門教育科目の内容を、より深く理解することができる。 ・自分の得意分野を開拓し、卒業後も生かせる応用力・実践力を身につけることができる。 ・生涯を通じて学び続けたり、研鑽しようという意欲を高めることができる。
評価方法	評価は各担当教員によるが、目安として創作・実技・レポート作成など50%、授業態度(参加内容等)50%で設定している。
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	音楽、音楽教育、児童文化の分野では、研究活動や作品の製作過程、またその成果を還元する中で、本学の学外実習先を訪問して実施。特別ニーズ教育学、野外教育、生涯発達心理学、教育学、行政・保健の分野でも、調査活動や現状視察等で関係機関への訪問を実施。
鳥取県内での就職との関連性	音楽、音楽教育、児童文化、教育学等の内容で研究を深める過程で、鳥取県内の保育・教育・福祉の実践現場への訪問や行政への調査等を実施。地域事情や就職先の実際の様子を認識することで、職業人としてのレディネスを獲得。
学習成果	後期に「特別研究Ⅱ」として活動を継続する関係から、実際には後期末に計画している特別研究発表会において、研究成果を披露する形となる。前期は具体的な成果物を得る期間ではないが、音楽や児童文化の分野では、途中段階の製作物の披露等により、最終的な成果発表に向けた精度を高めている段階である。実績としては、音楽教育の研究で「第7回中部発！食のみやこフェスティバル」(6/24)、「スペシャルオリンピックス鳥取地区大会総合開会式」(5/28)、「巖城はごろも苑敬老会」(9月)での発表がある。

6. 幼児教育保育学科(2)

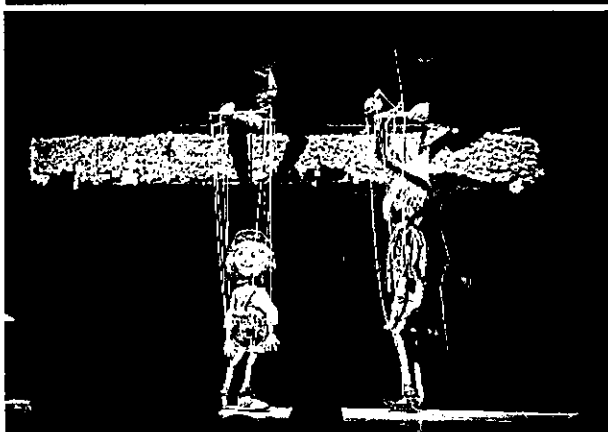
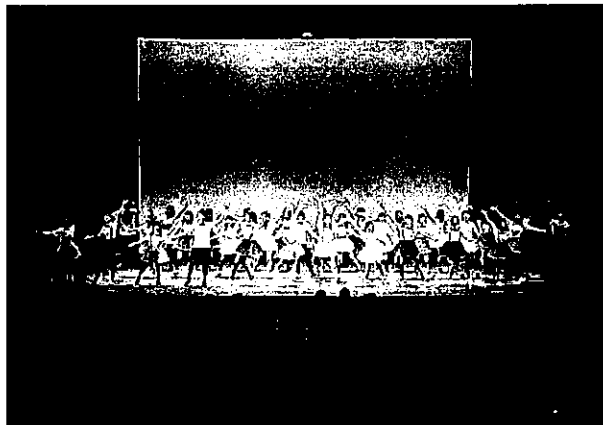
COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	幼児教育保育学科 2年生
区分 科目名	専門教育目 特別研究Ⅱ
選択種別・授業形態・単位数	選択 演習 1単位
授業担当者・所属	幼児教育保育学科専任教員
受講率(%) 受講者/対象者	(64.3) % 81/126
分野	地域志向教育(PBL含む)
授業概要	この科目は、保育者または社会人として自己の研究意識を持つため、設定される分野単位(研究室単位での開講)で研究テーマを設定し、様々な研究手法を通じて研究課題を探るものである。前期開講の「特別研究Ⅰ」に引き続いて開講される後期は研究を継続し、その成果をまとめ、特別研究発表会において発表する。
到達目標	・専門教育科目の内容を、より高度に理解することができる。 ・自分の得意分野を開拓し、卒業後に生かせる応用力・実践力を身につけることができる。 ・報告・実演・作品発表を通じて、保育者として必要な表現力や研鑽意欲を高めることができる。
評価方法	評価は各担当教員によるが、目安として創作・実技・レポート作成など50%、発表30%、授業態度(参加内容等)20%で設定している。
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	音楽、音楽教育、造形教育の分野では、研究活動や作品の製作過程、またその成果を還元する中で、本学の学外実習先を訪問して実施。社会福祉の分野では県内施設・民間団体、特別ニーズ教育の分野では県内の特別支援学校への調査や連携を行い、学外実習では選定できない現場との密度の濃い関わりが生まれた。
鳥取県内での就職との関連性	音楽、音楽教育、児童文化、野外教育、教育学、心理、保健、特別ニーズ教育学等の内容で研究を深める過程で、鳥取県内の保育・教育・福祉の実践現場への訪問や行政への調査等を実施することにより、地域事情や就職先の実際の様子を認識することで、職業人としてのレディネスを獲得することが出来た。

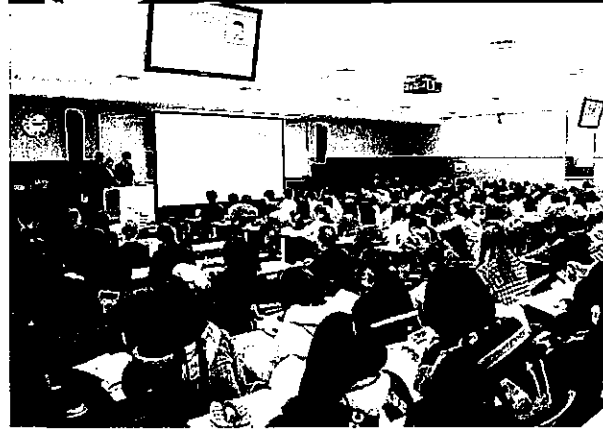
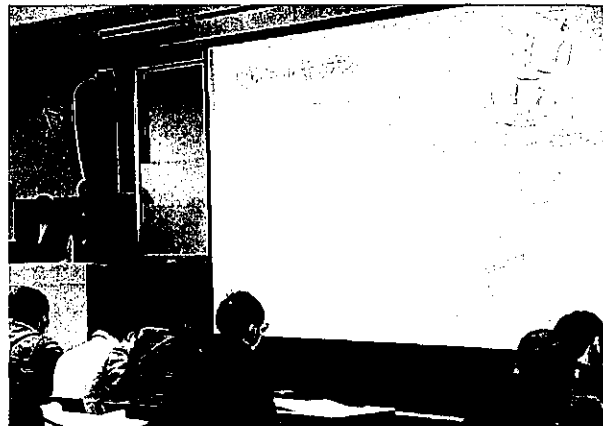
学 習 成 果

研究のまとめとして、2018年2月3日に特別研究発表会舞台発表の部をハワイアロハホール(湯梨浜町)で、2月5日に口頭発表の部を本学シグナスホール大講義室で開催した。いずれも学内外に公開の形で開催し、学外実習先等にも案内し、発表要旨抄録の冊子も作成して配布した。学外の会場であった舞台発表の部は、約400名の参加者を前にその成果を披露した。口頭発表の部には、調査活動で関係があった行政担当者等の参加があった。発表会終了後も、音楽の分野は県内外の公共施設や保育現場等での公演活動を実施する形をとっている。就職内定先の保育現場での公演活動は、数か月後に採用となる職場の様子を知るだけでなく、公演に必要な相手先とのやり取りが、「大学から社会へ」のスムーズな移行の機会になっていることが見られた。(添付の写真・新聞記事等参照)

【舞台発表の部】



【口頭発表の部】



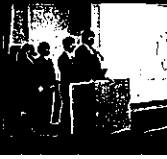
【チラシ】

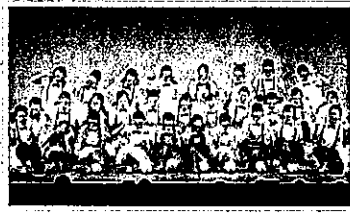



鳥取短期大学
幼児教育保育学科
平成29年度
**特別研究
発表会**

入場
無料

幼児教育保育学科の学生たちが、
幼児や福祉について
より深く学び、
一年間かけて研究してきた
成果を発表します。





舞台発表
日 平成30年2月3日
 13:30～(13:00開場)
会 ハワイアロハホール 大ホール
 〒682-0722 鳥取県東伯郡湯梨浜町はわい長瀬584
 【音楽教育】 たのおにいさんおねえさん
 スマイルコンサート
 【人形劇】 星を追う少年の物語
 【オペレッタ】 白鷺姫
出 認定こども園 鳥取短期大学附属こども園5歳児

口頭発表
日 平成30年2月5日
 15:00～(14:45開場)
会 鳥取短期大学シグナスホール大講義室
 〒682-8555 鳥取県倉吉市都賀854
 ●生涯学習時代における幼児保育のある子どもの生涯の質と課題
 ●子どもの権利擁護
 ●親子のための休活スペース～身近な素材を活かした遊びづくり～



鳥取短期大学
TOTTORI COLLEGE

【お問い合わせ】
 鳥取短期大学 幼児教育保育学科
TEL 0858-26-1811 (ホホ)
<http://www.cygatus.ac.jp/>

【報道】

来月3、5日
 ◆鳥取短大幼児教育
 保育学科「特別研究
 発表会」
 鳥取短期大幼児教育
 保育学科は「特別研究
 発表会」を2月3日午
 後1時半から湯梨浜町
 のハワイアロハホー
 ル、5日午後3時から
 同短大で開く。
 学生が1年間かけて
 研究してきた成果を
 発表する。
 3日は舞台発表。う
 ち6)1811。
 入場無料。問い合
 わせは電話0858(2

お知らせ

1年の集大成

鳥取短大特別研究発表会

鳥取短期大幼児教育保育学科の特別研究発表会が3日、湯梨浜町はわい長瀬のハワイアロハホールで開かれた。同科2年の約80人が舞台上がり、コンサートや人形劇、オペレッタを披露した。5日は同短大で口頭発表がある。

特別研究は少人数形式の授業で、専門分野に応じて学生が自らテーマを設け、幼稚園などでの実践活動やアンケートなどを通して研究を重ねている。1年間の成果発表の場として毎年、舞台と口頭の発表会を行っている。学生らはステージで「う

オペレッタ「白鷺姫」を熱演する学生ら＝3日、湯梨浜町はわい長瀬のハワイアロハホール



たのおにいさんおねえさんスマイルコンサート」や操り人形を使った劇、原作を参考に学生らがオリジナルで作ったオペレッタ「白鷺姫」を披露した。

会場には家族や卒業生、地域住民ら約400人が集まり、熱演する学生らに大きな拍手を送った。

(池田悠平)

本誌HPは動画

6. 幼児教育保育学科(3)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年 通年
学年・学科・専攻名	2年生 幼児教育保育学科
区分 科目名	専門教育科目 教育実習Ⅱ
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 2単位
授業担当者・所属	前田舞子、羽根田真弓 他 幼児教育保育学科
受講率(%) 受講者/対象者	(94.4)% 119/126
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	原則として、出身地の幼稚園を実習施設として2週間(14日間)の実習を行う。実習園の園長および幼稚園教職員による指導の下、観察・参加・指導実習を行う。また、研究保育のための指導案を作成し、配属クラス担任の指導助言のもとに実践する。
到達目標	・「教育実習Ⅰ」を踏まえて、子どもを取り巻く環境の深い考察および実践力を目指す。 ・クラス運営における子どもの行動の把握および、特性の理解ができる。 ・幼稚園教諭の職務内容・役割の理解、家庭との連携の重要性について考える。
評価方法	実習園の評定90%、提出物10%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	教育実習Ⅱは幼稚園教諭二種免許状を取得するにあたり、教育職員免許法・同法施行規則で規定される単位数のために必要な実習である。実習として認められるものは、幼稚園及び幼保連携型認定こども園の種別で、今年度は鳥取県内で計36か所で118名の実習を実施した。
鳥取県内での就職との関連性	教育実習Ⅱを行った学生の内、6法人で計8名の就職内定が決まった。中には、教育実習Ⅱを行った実習園での就職者もあり、実習を契機とした一定の関連性が見られた。
学習成果	幼稚園教諭免許状の取得は4年制大学が主流になりつつあるため、本学のような2年制短期大学での実習も4年制大学の実習と同じように評価軸で見られてしまう。そのため現場での評価は厳しいものの、実習を通じて学生は着実に成長していると言える。

6. 幼児教育保育学科(4)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 通年(1年次「保育実習Ⅰ－Ⅰ」は後期)
学年・学科・専攻名	1・2年生 幼児教育保育学科
区分 科目名	専門教育科目 保育実習Ⅰ－Ⅰ・Ⅰ－Ⅱ・Ⅱ・Ⅲ
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 各2単位
授業担当者・所属	宮崎百合、齊木恭子、菅田理一、國本真吾、南 潮 他 幼児教育保育学科
受講率(%) 受講者/対象者	【2年生】(90.5) % 114/126 注)卒業年次の2年生のみ掲載
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	【保育実習Ⅰ－Ⅰ】原則として出身地の保育所を実習施設とする。実習期間は2週間(実習日10日間)。保育所長および保育所職員が日々指導を行う。可能な限り、0歳児クラスから順次、全年齢のクラスで観察実習、参加実習を実施する。実習生は、指導案をもとにした部分指導実習を2回以上行うとともに、実習日誌を毎日記入し指導を受けるものとする。 【保育実習Ⅰ－Ⅱ】本学が指定する入所型の児童福祉施設または障害者支援施設において、原則10日間の宿泊(または2週間の通所)による実習を行なう。 【保育実習Ⅱ】原則として「保育実習Ⅰ－Ⅰ」を行った保育所で実習する。実習期間は2週間。保育所長および保育所職員から日々指導を受ける。可能な限り、同じクラスに2週間入り、遊びの細案を立案した指導実習を2回以上行う。実習日誌は毎日記入し指導を受け、実習終了後担当者へ提出する。 【保育実習Ⅲ】本学が指定する児童福祉施設または障害者支援施設において、原則10日間の宿泊(または2週間の通所)による実習を行なう。

到達目標	【保育実習Ⅰ－１】 ・子どもの年齢ごとの発達段階を保育の実践に即して理解している。 ・保育所保育に必要な、基本的知識と実的な技術を獲得している。 ・保育所および保育士の役割を理解し、保育者としての倫理を自覚している。 【保育実習Ⅰ－２】 ・社会的養護の必要性とその意義を理解することが出来る。 ・施設内の子ども・障害のある人の姿を発達的に理解することが出来る。 ・施設養護理論・実技を知り、養護・支援の実際や職員の職務の意義を深めることが出来る。 【保育実習Ⅱ】 ・「保育実習Ⅰ－１」の基礎の上に、より深い観察や応用的な実践力を目指す。 ・個々のニーズ等一人ひとりの子どもの把握および子ども集団の理解ができる。 ・担任の役割や保育環境構成、保育者・保護者とのコミュニケーションの重要性を認識する。 【保育実習Ⅲ】 ・社会的養護の必要性とその意義を、さらに深めることが出来る。 ・施設内の子ども・障害のある人の姿を、人間発達の視点から考察することが出来る。 ・施設の存在意義や保育士の職務の理解を土台に、保育士としての自己課題をもつことが出来る。
評価方法	【保育実習共通】レポート20%、実技・授業態度・発表・提出物等による実習施設の成績80%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	保育実習は、厚生労働省通知における「保育実習実施基準」に基づき実習先が指定されている。本学では、「保育実習Ⅰ－１」を保育所及び幼保連携型認定こども園、「保育実習Ⅰ－２」を児童福祉施設又は障害者支援施設における学外実習として資格必修に位置づけ、その上に選択必修の形で「保育実習Ⅱ」（保育所）もしくは「保育実習Ⅲ」（施設）を開講している。今年度、鳥取県内の86保育所（延べ101か所）、26施設（延べ42か所）において実習を実施した。
鳥取県内での就職との関連性	就職年次の2年生で見た場合、本学が契約する鳥取県内の保育実習受入れ法人の27法人・行政で、計50名の就職内定が決まった。中には、保育実習を行った実習園での就職者もあり、実習を契機とした一定の関連性が見られた。
学習成果	1年次の実習に比べて2年次の実習は、事務的な面や実践的な面で大きく成長していると言える。しかし、4年制大学と同じ評価軸での比較だと、特に基礎学力的な部分での成長が2年間では難しいところがある。それを示すための数値化は難しいが、実習を通じて学生は着実に成長していると言える。

7.特別科目(1)

COC+関連授業評価シート

年度・前・後期別	平成29年度 前期
学年・学科・専攻名	1年生 全学科
区分 科目名	特別科目 インターンシップA
選択種別・授業形態・ 単位数	選択 実習 1単位
授業担当者・所属	キャリア支援委員長 他 キャリア支援部
受講率(%) 受講者/ 対象者	(9.0) % 26 / 289
分 野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授 業 概 要	就業体験前後の学習内容が充実していることが特徴である。事前学習－就業体験－事後学習という一貫した教育プログラムが、就業体験からの貴重な気づきや学びを自発的・能動的・意欲的に引き出す。注意事項は「インターンシップB」とは異なる業種であることである。
到 達 目 標	・事前学習で自分の課題設定と社会人マナーを習得する。 ・インターンシップを通して職業観を向上させ、地元企業等の魅力を知る。 ・事後学習で自分の課題への気付き・参加者間の課題達成を共有し定着できる。
評 価 方 法	事前学習のレポート25%、実習での評価50%、事後学習の発表25%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	鳥取県内企業等の魅力を実習を通して体感できるとともに、職業人として求められる資質向上につながる。在学中の学びとも連動付けられる。
鳥取県内での就職との関連性	鳥取県内企業等の魅力を実習を通して体感することにより、就職希望業界や就職先の候補となりうる。

学 習 成 果

事前学習では、学科を超えてグループを組んで社会人マナーやインターンシップでの課題設定を行うことができた。合同企業説明会に参加して関心のある企業等のインターンシップ内容を直接聞くことができた。事後学習では、事前に設定した課題の達成状況の振り返りや新たな気づき等をグループで共有し、全体発表を行った。



7. 特別科目(2)

COC+関連授業評価シート

年度 前・後期別	平成29年度 後期
学年・学科・専攻名	1年生 全学科
区分 科目名	特別科目 インターンシップB
選択種別・授業形態・単位数	選択 実習 1単位
授業担当者・所属	キャリア支援委員長 他 キャリア支援部
受講率(%) 受講者/対象者	(8.2)% 23/279
分野	地域志向教育(PBL含む) キャリア教育
授業概要	就業体験前後の学習内容が充実していることが特徴である。事前学習－就業体験－事後学習という一貫した教育プログラムが、就業体験からの貴重な気づきや学びを自発的・能動的・意欲的に引き出す。注意事項は「インターンシップA」とは異なる業種であることである。
到達目標	・事前学習で自分の課題設定と社会人マナーを習得する。 ・インターンシップを通して職業観を向上させ、地元企業等の魅力を知る。 ・事後学習で自分の課題への気付き・参加者間の課題達成を共有し定着できる。
評価方法	事前学習のレポート25%、実習での評価50%、事後学習の発表25%
鳥取県内でのインターンシップ・学外実習との関連性	鳥取県内企業等の魅力を実習を通して体感できるとともに、職業人として求められる資質向上につながる。在学中の学びとも連動付けられる。
鳥取県内での就職との関連性	鳥取県内企業等の魅力を実習を通して体感することにより、就職希望業界や就職先の候補となりうる。

学 習 成 果

事前学習では、学科を超えてグループを組んで社会人マナーやインターンシップでの課題設定を行うことができた。合同企業説明会に参加して関心のある企業等のインターンシップ内容を直接聞くことができた。事後学習では事前に設定した課題の達成状況の振り返りや新たな気づき等をグループで共有し、全体発表を行った。



IV.研究の取組み

COC+関連研究評価シート

研究テーマ	食育に関する研究
授業担当者・所属	野津あきこ 生活学科 食物栄養専攻
協力機関	SC鳥取(ガイナレ鳥取)、鳥取県スポーツ栄養研究会
研究期間	平成29年4月～30年3月(30年度も継続)
研究概要	県内のプロスポーツ選手やジュニアアスリートの栄養教育・栄養支援を行い、栄養に関する課題解決に向けた取組みを通して研究を行った。なお、この活動は、県内の栄養士(10名:内公認スポーツ栄養士1名)と共同して行っている。 (1)プロサッカー選手に対する栄養サポートを実施。栄養アセスメント→個人目標の設定→サポート計画→サポート実施→モニタリング→個人評価→個人目標達成→終了という一連の流れに沿って実施し、その現状や指導効果を総合的に評価した。 (2)ジュニアアスリートへの栄養アセスメント(BDHQ15yや生活習慣調査等)及び栄養教育・支援を行った。 【スポーツ食育支援の趣旨】 本活動・研究は、県内でスポーツ活動を行う人たちに対して食事・栄養の側面から安全なスポーツ活動をするのための支援として行っている。成長期にある児童・生徒に対しては安全かつ健全な成長のためのスポーツ食育支援が重要である。県内栄養教諭・学校栄養職員もスポーツ活動をする子どもたちへの食育支援のためにスポーツ栄養学の知識は必須となっている。
研究成果	研究から得られた成果は、学生に授業を通して伝え、スポーツ関連分野の栄養士の実践活動、スポーツ関連分野の栄養士の役割を理解するために役立った。スポーツ栄養に興味を持つ学生も多いため、栄養士の仕事の面白さ、やりがいを感じることができる。 ●スポーツ食育の課題解決に向けた具体的な取組の検討 スポーツ選手やスポーツ活動をする児童の食事や生活習慣について調べた結果、野菜摂取量の不足(特に緑黄色野菜)や朝食の内容に課題がある。自覚はあるものの改善に結びつかない選手も多い。 また個別管理をしているプロサッカー選手に関しては、熱中症予防に関して夏場だけではなく6月ごろから練習・試合後の体重減少率が高くなるなど、水分補給への注意が必要であるために個人個人にトレーニング前後の体重変化率をもとに水分摂取状況のデータを示した(図1)。その結果、2017年シーズンの最終評価として「熱中症の症状なし」92%(25名中23名)、「重症化はしなかったが少しはあった」8%(2名中23名)であった(最終評価アンケートは、10月26日実施)。またシーズンを通して体重および体脂肪の変化を確認しているが、体重や除脂肪体重及び体脂肪率を個別指導時に示すことで、個人で夏場に体重を落とさないことなど、体重コントロールを行うことができていた(図2)。BDHQによる栄養素等摂取量については、2月調査(シーズン前)と10月末(シーズン終わり)の比較では、カルシウム、鉄、ビタミンCなどスポーツ選手に必要な栄養素について、有意な増加がみられた。 ●スポーツ食育支援の趣旨 本活動・研究は、県内でスポーツ活動を行う人たちに対して食事・栄養の側面から安全なスポーツ活動のための支援である。成長期にある児童・生徒に対しては安全かつ健全な成長のためのスポーツ食育支援が重要である。県内で、スポーツ活動を行う子どもたちへの支援も本調査結果を活用して引き続き支援を行っていく。

2017年栄養サポート スケジュール

月日	方 法	内 容
3/30 15:00	講義① スクリーン プロジェクタ ー準備	・サプリメント、ドーピング ・食事の基本とサプリメント ・食事記録の方法説明 【アセスメント】BDHQ（食物摂取頻度調査）、POMS、生活習慣アンケート（事前に送付して記入してもらう）
4/20 午後	個別①	アセスメントの結果をもとに、個別の選手の課題の確認 ・選手の指導に使う料理等の展示
6/8	講義② 食事会①	水分補給・疲労回復 目的：1食分の食事量やバランスを確認 熱中症と脱水症を予防
	個別②	・食事チェック
7/20 午後	個別③	・食事チェック
9/7	食事会②	目的：1食分の食事量やバランスを再確認 夏バテ防止
	個別④	・食事チェック
10/26 午後	個別⑤	・食事チェック ・この夏の体調、水分補給など（効果測定：聞き取りによるアンケート実施）、BDHQ ・今シーズンの体重、体脂肪、除脂肪体重の変化 ・オフ期の食事

研究 成 果

図1. TR・試合前後の体重変化率(月平均)

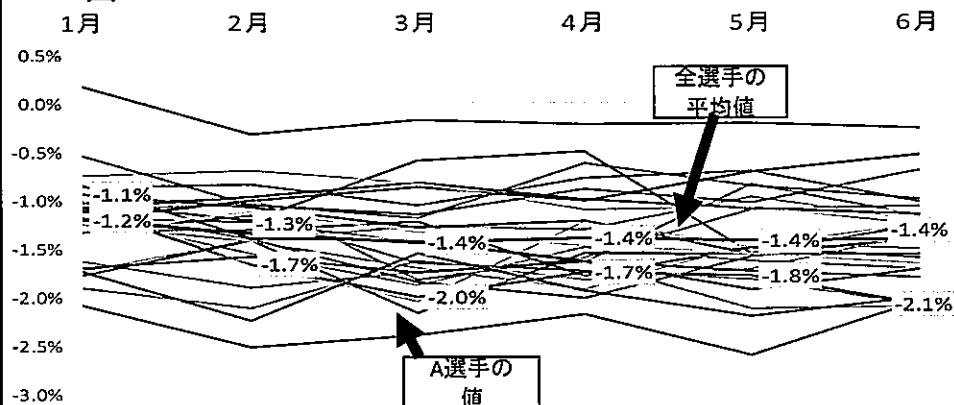


図2. 体重(kg)・除脂肪体重(kg)・体脂肪率(%)

